

令和6年度公共建築月間記念行事

保全技術研究会・記念講演会

やま した みつ ひろ
山下 光博

(一財)建築保全センター 保全技術研究所第一研究部 主任研究員

1 はじめに

令和6年度の保全技術研究会・記念講演会は、11月20日(水)にイノカンファレンスセンターにて、約67名の参加者を迎えて開催いたしました。今年度は、午後のみの開催にしたほか、当日のWEB配信(約66名)及び日を改めてWEB配信(約30名)も行いました。

開会にあたり、当財団鈴木理事長より、「地方公共団体においてご担当が抱える課題の解決のヒントになれば幸いである。厳しい財政状況の中で本日の研究会・講演会がお役に立つものと考えている」との挨拶をいたしました。



鈴木理事長

2 保全技術研究会〈研究発表〉

保全技術研究会では、まず研究発表として当財団の中田修より「公共建築マネジメントの状況調査報告」を行いました。この調査は、「公共施設等総合管理計画や個別施設計画等の見直し」、「更新・統廃合・長寿命化」、「財政負担の軽減・平準化」の取組みに資するよう、アンケートに協



中田第一研究部長

力いただいた自治体へのフィードバックを主目的に行っているもので、今年度で16回目となります。今回は455都市から回答をいただき、回答率は53%となっています。調査では、「建築・設備の専門職員の充足状況、必要な技術支援」、「個別施設計画の策定状況」、「施設マネジメントにおける民間活力の導入」を中心に報告を行いました。

3 保全技術研究会〈パネルディスカッション〉

今年のパネルディスカッションのテーマは「これからの公共建築マネジメントを考える」とし、サブテーマを「DX(デジタルトランスフォーメーション)における自治体庁舎の将来像」としました。今回は、特に職員の働き方改革に焦点を当て、効率的かつ効果的に業務を遂行できる、働きやすい庁舎の先行事例から見えてくる推進の方策や課題を踏まえつつ、研究発表での報告内容を織り交ぜて議論を行いました。

事例発表は、東京都デジタルサービス局デジタル戦略部デジタル改革担当課長の吉成恵子氏より「都政の構造改革「シン・トセイ」～都庁のワークスタイル変革プロジェクト～」について、都庁という大きな組織における積極的な取り組み



吉成氏

について、紹介していただきました。続いて、愛媛県西予市政策企画部デジタル推進課デジタル推進係係長の稲口智博氏より「Change せいよ！～西予市におけるオフィス改革の取り組み～」について、地方都市における先駆的事例を紹介いただきました。



その後、吉成氏、稲口氏に加え、日本経済研究所の足立文氏、山本康友東京都立大学客員教授がパネリストとして登壇し、当財団参事林理氏のコーディネートにより、ディスカッションが行われました。

はじめに、足立氏より「地方公共団体におけるDX活用による働き方改革の実態」を紹介



していただきました。その後、林氏より三豊市、狭山市の参考事例の紹介がありました。

改革のプロセスにおいて効果のあった取り組みは何か、取組みに際しての課題にはどのようなものがあるか、改革の成果に対する評価について効果はどうか、課題としてはどのようなものが挙げられるかといった観点で議論が進められました。

議論では、クラウド導入に対する組織の考え方の変革や職員の意識改革、住民や議会の理解、さらには、文書削減量の設定目標、働き方のあり方など、多くの課題が挙げられました。

西予市においては、最初は、なかなか庁内の理解が得られなくても、根気強く継続的に理解を得ながら進めていくことで、当初理解を示していた

だけなかった人が先頭に立って進めていく意識や体制が醸成されていったとのことでした。

東京都においても順次庁内整備していく中で、自らのオフィスを自らで作るといった意識が広がっていったとのことでした。共通して、DX活用による職場環境等の整備により、職員の業務の質の向上、ひいては市民へのサービス向上につながるといった共通認識がこれらの先進的な取り組みを支えていることが窺えました。

4 記念講演会

当財団下野専務理事より、東京都市大学教授手塚貴晴教授の紹介があり、「百年後」と題して、記念講演会に入りました。

「たった25年しか経っていない建築が時代遅れだといわれ、50年を経ると議論の余地なく建



替えが前提となる。」「建築はその時代の人々による精一杯の努力であり、生きた証でもある。」と建築への思いを話されました。「建築はモノでなく、出来事である」という事例として、三条市のまちなか交流広場「ステージえんがわ」、富岡商工会議所、インドヒマラヤの学校などを紹介いただきました。さらに「建築の優劣に関わらず、機能的な理由だけで取り壊し続けると文化が残らない国になってしまう。建築は少なくとも100年生きるべきであり、長く愛される建築をつくるためには、誰のための、何のための建築かを忘れてはならない」と100年後の建築について熱くご講演いただきました。